

# 述語削除と法助動詞 must の意味\*

木 村 宣 美

## 0. はじめに

英語では、(1)に示されているように、等位項 (conjuncts) に同一の述語 (動詞句) が生じる時、2 番目の等位項の動詞句を削除することが許される。この文を導くのが、述語削除 (XP Deletion; X = V, N, A, P) (Williams 1984, Kaga 1985) である。

- (1) a. John must go to the park and Bill must go to the park.  
b. John must go to the park and Bill must, too.

(1b) では、述語削除によって、同一の動詞句 (Verb Phrase: VP) go to the park が削除されている。この現象に関して、浅川・鎌田 (1986) や今西・浅野 (1990) で、法助動詞 (Modal) のみが削除されずに生じる時、陳述緩和的 (epistemic) 意味ではなく根源的 (root) 意味が好まれるという事実が指摘されている。例えば、(1b) の二番目の等位項の must の解釈は根源的意味を表わす。法助動詞 must は、一般に、陳述緩和的意味「～に違いない」と根源的意味「～でなければならない」の両方の意味を表わすことができる (cf. 荒木・小野・中野 1977) にもかかわらず、述語削除が適用されて、must のみが削除されずに生じる時、何故、must の意味は根源的意味が好まれるのであろうか。本稿では、浅川・鎌田 (1986) や今西・浅野 (1990) で指摘されている述語削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味の相関に対して、モダリティ (modality) と命題内容 (proposition) を峻別する階層意味論モデル (中右 1994) の枠組みで、2つの仮説 [ i) モダリティと命題内容を峻別する, ii) 助動詞の be/have と動詞の be/have を語彙的に区別する ] に基づく分析を提案する。

---

\* 本稿は、英語語法文法学会第23回大会 (龍谷大学深草学舎; 平成27年10月24日) での発表内容に基づいている。なお、本研究は、平成26年度 - 平成28年度日本学術振興会科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (基盤研究 (C) 研究課題『右方移動現象の分析に基づく併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの解明』 (課題番号 26370557)) に基づく研究成果の一部である。また、例文の文法性の判断は、弘前大学人文学部の Carpenter, Victor Lee 氏による。ここに記し、感謝申し上げる。

## 1. 述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味

### 1.1. 法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味と状態性

述語削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味の相関を議論する前に、削除が適用されていない文の法助動詞の陳述緩和的・根源的意味と述語の状態性 (stativity) を整理する。根源的法助動詞は非状態的な (non-stative) 文に生じ、陳述緩和的法助動詞は状態的な (stative) 文に生じる (荒木・小野・中野 1977, 太田 1980, Palmer 1987, Declerck 1991, Huddleston and Pullum 2002) ので、法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味と述語のタイプを、(2) として、要約することができる。

- (2) a. 非状態的な (non-stative) 文：根源的意味<sup>1</sup>

John must come.

- b. 状態的な (stative) 文：陳述緩和的意味

i) John must be there.

ii) John must be working now.

iii) He must have finished it.

(2a) は非状態 (行為) 動詞 come を含み、法助動詞 must の意味は根源的意味である。他方、(2b) は状態を表す述語 be there/be working now/have finished it を含み、その解釈は陳述緩和的意味である。

(2) にまとめた述語の状態性と法助動詞 must の意味の相関は、浅川・鎌田 (1986) や今西・浅野 (1990) によれば、動詞のみならず、形容詞表現にも当てはまる。(Akamajian and Wasow 1975, Huddleston and Pullum 2002) この点を、(3) を例にとり、考えてみることにする。

- (3) a. John must be careful.

b. John must be tall.

状態的 / 非状態的な意味を表す形容詞表現 be careful を含む文 (3a) には陳述緩和的意味と根源的意味が可能であるが、状態的形容詞表現 be tall を含む文 (3b) には陳述緩和的意味しかない。動詞と形容詞表現のタイプと法助動詞 must の意味の相関は、非状態的述語と must が生じる時は根源的意味を表わし、状態的述語と生じる時は陳述緩和的意味を表わすと要約することができる。

<sup>1</sup> 荒木・小野・中野 (1977: 371) によれば、非状態的な文と法助動詞 must が共起する時、must は根源的意味を表わし、陳述緩和的意味を表わすことはない。Must が陳述緩和的意味を表わすと解される場合は、習慣的 (habitual) な解釈であることが指摘されている。また、私の情報提供者も同様の判断を示し、非状態動詞 go や come が含まれる文の解釈として、陳述緩和的意味はない。

## 1.2. 法助動詞 mustの陳述緩和的・根源的意味と述語削除

述語削除と法助動詞 mustの陳述緩和的・根源的意味及び文の容認可能性の違いを、本節では概観する。浅川・鎌田(1986: 187)によれば、(4)に述語削除が適用されると、(5)の3種類の文が導かれる。

- (4) John must have been sleeping, and Mary must have been sleeping, too.
- (5) John must have been sleeping, and Mary {a. must have been, b. must have, c.\*must}, too.

(5c)は非文法的と判断される場合が多く、文の容認可能性が法助動詞の意味と密接な関連があることが、浅川・鎌田(1986: 187)で指摘されている。(4)の must have been sleepingの mustは陳述緩和的の意味であり、述語削除が適用された(5a,b)の mustも陳述緩和的の意味である。ところが、これに対し、(5c)の mustは根源的の意味で解釈される傾向があることが報告されている。この(5c)の法助動詞 mustの解釈の違いが、浅川・鎌田(1986)によれば、(5c)の容認可能性が低いと判断される理由である。すなわち、(5c)の最初の節の mustは陳述緩和的の意味であるが2番目の節の mustは根源的の意味であり、等位構造における法助動詞の意味解釈に矛盾が生じ、このため、文の容認可能性が低くなる。

等位構造の法助動詞の意味解釈に矛盾が生じることで文の容認可能性が低くなることを支持する現象として、浅川・鎌田(1986: 187-188)では、制御可能な行為や状態を表わす場合の述語削除と法助動詞 mustの陳述緩和的・根源的意味に関わる現象が取り上げられている。

- (6) John must be eating already, and Bill {a. must be, b.\*must}, too.
- (7) John must be a good boy, and Bill {a. must be, b. must}, too.

(6)の be eating already は状態に解釈されるので、must は陳述緩和的の意味を持つ。(cf. Declerck 1991)しかしながら、(6b)では mustの根源的の意味が好まれ、両方の mustの意味に矛盾が生じ、容認不可能となる。これに対して、(7)の be a good boy は状態「良い子である」とも制御可能な行為「良い子になる」とも解釈することができる。従って、法助動詞 mustは陳述緩和的の意味にも根源的の意味にも解釈することができ、結果として、(7a,b)はともに容認可能となる。

浅川・鎌田(1986)の指摘に基づき、説明が与えられなければならない問題は、(8)として、要約することができる。

- (8) a. be/have/have been が省略されずに法助動詞とともに生じる時、法助動詞の意味は陳述緩和的意味となる。
- b. 法助動詞のみが省略されずに生じる時、法助動詞の意味は根源的意味が好まれる。<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 私の情報提供者によれば、「根源的の意味が好まれる」というよりも「根源的意味となる」との記述の方が適切である。

- c. 述語が制御可能な行為を表わす時，法助動詞のみが削除されずに生じることができる。  
(法助動詞の意味は根源の意味である。)
- d. 述語が状態を表わす時，法助動詞のみが削除されずに生じることはいできない。(法助動詞の意味は根源の意味である。)

第1節での先行研究の成果に基づき，述語削除と法助動詞 *must* の陳述緩和的・根源の意味の相関を図式化すると，(9)として，要約することができる。

- (9) a. … Modal<sub>[+Epistemic]</sub> *be/have/have been* [ △ ]
- b. … Modal<sub>[+Root]</sub> [ △ ] (Modalは法助動詞，△は削除要素を表わす。)

(9a) が表わしていることは，(5a, b), (6a), (7a) から明らかなように，*be/have/have been* が生じている時，法助動詞 *must* の意味は陳述緩和の意味となるということである。他方，(9b) が表わしていることは，(1b), (5c), (6b), (7b) から明らかなように，法助動詞以外の述部全体が削除される時，*must* の意味は根源の意味となるということである。

第2節では，2つの仮説を仮定することで，述語削除と法助動詞 *must* の陳述緩和的・根源の意味の相関及び文の容認可能性の違いに説明を与えることができることを論じる。

## 2. 「モダリティと命題内容の峻別」と「2種類の Be/Have」に基づく分析

第1節では，述語削除と法助動詞 *must* の陳述緩和的・根源の意味及び文の容認可能性の違いを概観し，説明が与えられるべき問題が(8)で，述語削除と法助動詞 *must* の陳述緩和的・根源の意味の相関が(9)であることを指摘した。説明されなければならない問題(8)に対して，本稿では，仮説(10a, b)に基づく分析を提案し，その妥当性を吟味する。

- (10) a. 述語削除の認可詞(licensor)は命題内容である。
- b. 助動詞の *be/have* と動詞の *be/have* がある。(Kaga 1985, cf. Williams 1984)

(9a) に示されているように，従来，動詞句削除(VP Deletion)が適用されて導かれると分析された現象は，Williams (1984) や Kaga (1985) に従い，述語(predicates) (動詞句・名詞句・形容詞句・前置詞句)が削除される現象(詳細は，第2.2節を参照のこと。)であり，定形の助動詞や時制が認可詞であると分析されているが，本稿では，述語削除(XP Deletion)の認可詞(cf. Zagana 1988, Lobeck 1995, Bošković 2014)はモダリティではなく命題内容であると主張する。さらに，(9b) に示されているように，助動詞の *be/have* と動詞の *be/have* は語彙的に区別される(Kaga 1985, cf. Williams 1984)と主張する。

述語削除と法助動詞 *must* の解釈の相関は、(9) から明らかなように、法助動詞以外の助動詞 (AUX) が含まれているかどうかによって決まると本稿では主張する。述語削除は定形の助動詞を除き、述語が削除される現象である。(9) では、述語は削除要素の  $\triangle$  として表記されている。この削除要素  $\triangle$  の構成員には、述語である VP, NP, AP, PP が含まれ、助動詞が含まれることはない。(9a) は、法助動詞以外の助動詞も削除されずに生じる時、助動詞があることから、文全体の意味は状態的であり、法助動詞 *must* の意味は陳述緩和の意味となる。他方、(9b) は、法助動詞のみが削除されずに生じているので、述語がすべて削除されていることになる。法助動詞以外の助動詞がないことから、文全体の意味は制御可能な非状態的行為を表わし、法助動詞の意味は陳述緩和の意味ではなく根源の意味となる。何故、述語全体が削除され法助動詞のみが生じる時、法助動詞の解釈は根源の意味となるのであろうか。述語削除と法助動詞 *must* の意味の相関に対する「モダリティと命題内容の峻別」と「2種類の Be/Have」に基づく分析を次節で提案する。

## 2.1. モダリティと命題内容の峻別

中右 (1994) は、文には一定不変の意味構造があることを指摘し、文の意味構造を階層意味論という一般的枠組みとして定式化している。階層意味論の文の意味構造は、概略、(11) のように表示される。

- (11)  $[_{M(S)2} D-MOD [_{M(S)1} S-MOD [_{PROP4} POL [_{PROP3} TNS [_{PROP2} ASP [_{PROPI} PRED ARG^n (n \geq 1)]]]]]]]$   
(中右 1994: 15)

階層意味論モデルでは、文の意味には命題的なものと非命題的なものがあり、文の意味骨格はモダリティ (発話時点 (瞬間的現在時) における話し手の心的態度) と命題内容の二重構造を持つ。

階層意味論の観点で、(12) を例にとり、付加疑問文 (tag question) 形成を見てみることにする。

- (12) a. I always told you that I was a bit mad, {didn't I ? / \*wasn't I ?}  
b. I think Tom likes foreign beers, {\*don't I ? / doesn't he ?} (中右 1994: 166-167)

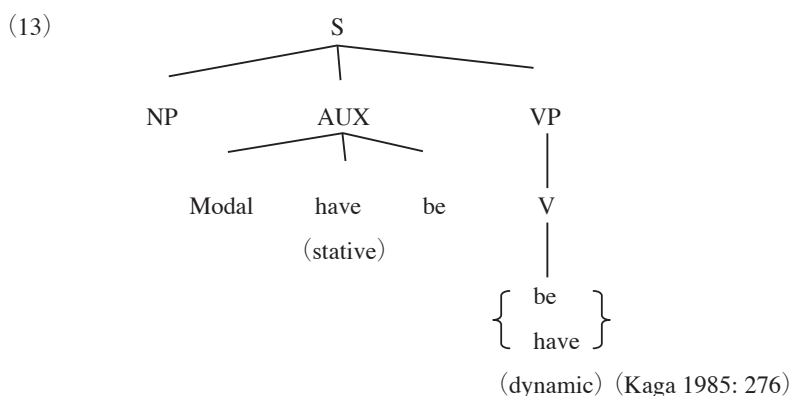
(12a) は、主節の主語 I と助動詞 (過去時制) に対応し、didn't I が付加されている通常の付加疑問文である。一方、(12b) には異なる仕組みが関与する。すなわち、主節の主語と助動詞 (時制) ではなく、従属節の主語と助動詞 (時制) に呼応し、doesn't he が付加されている。この付加疑問文形成の違いは、中右 (1994: 169) によれば、付加疑問節 (の主語と動詞) は主文の全体命題 PROP4 (の主語と動詞) に照応するとする付加疑問文の照応原理に基づき説明される。(12b) の I think はモダリティであり、付加疑問文形成において、命題内容ではないので対象とはならないのである。

付加疑問文形成と同様に、モダリティが対象から外れるという現象が、述語削除にも関与してい

るというのが本稿の主張である。陳述緩和的法助動詞は発話時点(瞬間的現在時)における話し手の心的態度を表わしているが、根源的法助動詞はそうではない。中右(1994)の定義に基づくと、陳述緩和的法助動詞はモダリティであるが、根源的法助動詞はモダリティではなく命題内容である。モダリティが照応の対象から外れる付加疑問文形成と同様に、モダリティである陳述緩和的法助動詞は述語削除の認可詞の対象から外れる。すなわち、仮説(10a)の帰結として、法助動詞のみが削除されずに生じる時、認可詞は命題内容でなければならないので、法助動詞はその解釈が根源的となるというのが本稿の分析である。

## 2.2. 2種類の Be/Have : 助動詞あるいは動詞としての Be/Have

Kaga(1985)では、英語の助動詞システムにおいて、助動詞(AUX)が独自の範疇として存在するという立場に立ち、beとhaveが静的(stative)か、動的(dynamic)かに基づき、2つのクラスに分類される。(13)の句構造(phrase structure)に示されているように、静的なbeとhaveは助動詞で、動的なbeとhaveは動詞であるとする分析が提案されている。<sup>3</sup>



静的なbeとhaveは助動詞で、動的なbeとhaveは動詞であるとする分析により、主語・助動詞の倒置(Subject-AUX Inversion)、動詞句削除(Verb Phrase Deletion: VPD)、命令文(Imperative Sentences)、DOによる支え(Do-Support)、To-Be削除(To-Be Deletion)の定式化が簡略化され、従来の分析では十分に説明することのできない現象に適格な説明を与えることができることが示されている。さらに、Kaga(1985)では、Akmajian and Wasow(1975)やAkmajian, Steele, and Wasow(1979)やBošković(2014)とは異なり、beやhaveが助動詞的な振る舞いをすることを説明するための操作である、範疇「動詞句」に支配されているbeやhaveが範疇「助動詞」に移動する効果を持つ転移規則(shifting rule)

<sup>3</sup> Kaga(1985: 278)によれば、Stative be とは progressive be, stative copula be, stative passive be, existential be で、Dynamic be とは dynamic copula be, dynamic passive be である。また、Stative have とは perfective have と possessional have で、Dynamic have とは actional have と causative have である。



を仮定しない。というのは、Kaga (1985) によれば、be や have の特性の違いに言及することなく転移規則が定式化されていて、誤った予測をするからである。(詳細は、Kaga (1985) を参照のこと。)

### 3. 法助動詞のみの残留と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味

第2節では、述語削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味の相関は、法助動詞以外の助動詞の存在によって決まると主張した。すなわち、法助動詞以外の助動詞も削除されずに生じる時、助動詞があることから、文全体の意味は状態を表わし、法助動詞の意味は陳述緩和的意味となるが、法助動詞のみが削除されずに生じる時、法助動詞以外の助動詞がないことから、文全体の意味は制御可能な非状態的行為を表わし、法助動詞の意味は根源的意味となるという規則性があることを指摘した。述語削除と法助動詞 must の意味の相関に対する仮説 (10a, b) (「モダリティと命題内容の峻別」と「2種類の Be/Have」) に基づく分析を仮定すると、述語全体が削除されて法助動詞のみが生じる時、法助動詞の解釈が根源的意味となる問題に関して、法助動詞のみが削除されずに生じる時、i) 述語削除の認可詞は命題内容でなければならず、また、ii) 助動詞がないことから述語がすべて削除された非状態的な文であると解釈され、法助動詞の解釈は根源的意味となると分析することになる。

本節では、仮説 (10a, b) を仮定する分析に基づき、述語削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味の相関及び文の容認可能性の違いに説明を加えることにする。まず最初に、状態的な完了形を含む文 (5) [(14) として採録する。] を考えてみることにする。

(14) [= (5)] John must have been sleeping, and Mary {a. must have been, b. must have, c. \*must }, too.

(15) \*Have been sleeping!

(14) の have been sleeping は、(15) の命令文が非文法的であることから明らかなように、助動詞表現であり、文の意味は状態を表わす。(14a, b) では述語 sleeping が、(14b) では更に助動詞 been が削除されている。命題内容である静的な助動詞の have been や have が生じているので、状態的な文の must の解釈は陳述緩和的意味となる。双方の等位項の解釈に矛盾が生じることがなく、文法的である。他方、(14c) では、静的な助動詞 have と been が動詞 sleeping とともに削除され、法助動詞 must しか存在しない。Must が述語削除を認可する唯一の命題内容で、結果として、文全体が非状態的な文であると解釈され、根源的意味を表わすことになる。この結果、(14c) の最初の節の must は陳述緩和的意味を、2 番目の節の must は根源的意味を表わすので、法助動詞 must の意味解釈に矛盾が生じ、文の容認可能性が低くなる。

次に、状態的な進行形を含む文 (6) [(16) として採録する。] を考えてみることにする。

(16) [= (6)] John must be eating already, and Bill {a. must be, b. \*must}, too.

(17) \*Be eating already!

(16) の be eating already は、(17) の非文法性から明らかなように、(15) と同様に、状態を表わす。よって、(16) の must の解釈は陳述緩和的の意味である。(16a) では述語 eating already が削除され、静的な助動詞 be が削除されずに生じている。述語が eating already で be が助動詞だからである。文全体の解釈は陳述緩和的の意味を表わし、双方の等位項の法助動詞の意味に矛盾が生じないので、文法的な文である。他方、(16b) では静的な助動詞 be が削除され、must のみが生じている。Must が述語削除を認可する唯一の命題内容であり、この結果、非状態的な文であると解釈され、must の解釈は根源的の意味となる。(16b) では、(14c) と同様に、最初の節の must は陳述緩和的の意味を、2 番目の節の must は根源的の意味を表わしている。故に、(16b) の等位項の法助動詞の解釈に矛盾が生じ、文の容認可能性が低くなる。

最後に、状态的・非状态的の形容詞表現(安井・秋山・中村 1976)を含む文(7) [(18) として採録する。] を考えてみることにする。

(18) [= (7)] John must be a good boy, and Bill {a. must be, b. must}, too.

(19) a. \*Be a boy!

b. Be a good boy!

Be a good boy は状態「良い子である」とも制御可能な行為「良い子になる」とも解釈することができる。この曖昧性は、命令文の文法性の違い(19a)と(19b)に対応する。命令文が許されない(19a)の be a boy の解釈は状態「良い子である」であり、命令文が許される(19b)の be a good boy の解釈は制御可能な行為「良い子になる」である。このように、be a good boy の意味は曖昧なので、(18a) の法助動詞 must の解釈は陳述緩和的の意味で、(18b) は根源的の意味である。(18a) では、述語 a good boy が削除され、静的な助動詞 be が削除されずに生じている。この文の解釈は状態を表わし、解釈は「良い子である」である。Must の解釈は、(14a, b) や(16a) と同様に、陳述緩和的の意味となる。ともに陳述緩和的の意味を表わしているので、文の解釈に意味上の矛盾は生じない。一方、(18b) では動的な動詞である be も削除され、must のみが生じている。Be a good boy の曖昧性から、(14c) や(16b) とは異なり、be は動的な動詞で be a good boy 全体が動詞句という述語であると分析することができる。この結果、制御可能な行為「良い子になる」を表わす be a good boy が削除された非状態的な文であり、(18b) の等位項の must の解釈はともに根源的の意味を表わし、意味に矛盾が生じないので、(14c) や(16b) とは異なり、容認可能となる。



## 4. 法助動詞の根源的意味と完了形・進行形

### 4.1. 完了形・進行形と副詞的語句

荒木・小野・中野(1977: 345-346)によれば、法助動詞と時の解釈に関して、陳述緩和的法助動詞に過去の出来事を表わす完了形の動詞句が後続することが許されるが、根源的法助動詞では許されない。<sup>4</sup>

(20) a. John {will/may/cannot/must} have been there yesterday.

b. \*John {will/may/can/must} have visited Mary yesterday.

(21) a. You {may/can/must} be here now.

b. John {will/may/can/must} visit Mary tomorrow.

陳述緩和的法助動詞が含まれる(20a)には過去の出来事を表わす完了形が後続することが許されるが、根源的法助動詞が含まれる(20b)では後続することは許されない。(21)に示されているように、過去ではなく現在あるいは未来の出来事を表わさなければならない。(20-21)から明らかなように、陳述緩和的法助動詞は時制が表わす時以前に生じた現実の出来事を表わす命題と共起することができるのに対し、根源的法助動詞はできず、時制が表わす時かそれ以後の時でなければならない。(20a)と(20b)の文法性の違いは、完了形の文は状態を表わす文であり、結果として、法助動詞の解釈は陳述緩和的の意味でなければならないことを示している。状態文が根源的の意味を表わすことは通例許されないのである。

しかしながら、太田(1980: 461)で指摘されているように、完了形の文において、法助動詞 *must* が根源的意味を表わすことができる場合があることが指摘されている。完了形の述語が未来の出来事を表わす場合である。

(22) You must have completed the work by next April. (荒木・小野・中野 1977: 346)

(22) は、根源的法助動詞 *must* が生じるのは非状态的で制御可能な文であるとする一般化(2a)との関連で興味深い。状態の意味を表わす完了形を含んでいる文と根源的法助動詞は相容れないからである。未来の出来事を表わす副詞的語句 *by next April* が付加された(22)は、完了形を含む文であるが、この一般化(2a)に従うと、*have* が動的な特性、すなわち、非状态的な特性を持ち、*must* が根

<sup>4</sup> 太田(1980: 461)でも、(i)は根源的意味にはならないことが指摘されている。

(i) He must have come yesterday.

根源的法助動詞は、(ii)に示されているように、陳述緩和的法助動詞とは異なり、非状态的の述語と生じ、未来時の出来事を表わすのが通例であることが指摘されている。

(ii) a. John must come. b. He must come tomorrow. (荒木・小野・中野 1977: 369-371)

源的意味を表わすことが可能となったと言えるのであろうか。さらに、荒木・小野・中野(1977: 391)では、状態の意味を表わす進行形を含む文に未来時を志向する時の副詞節が付加されると *must* の解釈が根源的意味を表わすことが可能になる例として、(23) が指摘されている。

(23) He must be working when she visits him.

(23) では、副詞節 *when she visits him* が付加されることにより、非状態的な命題内容を表わすことが可能となり、この結果として、法助動詞の意味は根源的な意味を表わすことができるようになったと言えるのであろうか。未来の出来事を表わす副詞的語句や副詞節が付加される時、状態を通常表わす進行形や完了形の文が非状態的な意味を表わすことができるのか、次節で考察する。

#### 4.2. 完了形・進行形と命令文

状態の意味を通常表わす完了形や進行形の文が、副詞的語句や副詞節が付加されることにより、法助動詞 *must* が根源的意味を表わすことができるようになる場合が指摘されている。本節では、副詞的語句や副詞節が加えられることで、状態的述語が非状態的述語に変化する可能性を検討する。

(5) と (14) は (24), (6) と (16) は (25) として採録する。<sup>5</sup>

(24) [= (5), (14)] John must have been sleeping, and Mary {a. must have been, b. must have, c.\*must}, too.

(25) [= (6), (16)] John must be eating already, and Bill {a. must be, b.\*must}, too.

まず最初に、副詞節が付加されることにより、進行形を含む文が非状態的な意味を表わし、結果として、法助動詞 *must* が根源的意味を表わすことができるようになることを指摘する。この点を、(26) を例にとり、考えてみることにする。

(26) a. John must be eating when he comes, and Bill must, too.

b. John must be working when she visits, and Bill must, too.

進行形が含まれる文 (26a, b) に副詞節 *when he comes/when she visits* が付加され、法助動詞は根源的意味を表わしている。すなわち、状態の意味を通例表わす進行形を含む文が、副詞節が付加されたことで、未来の出来事を表わし、非状態的な意味を表現することができるようになったと言える。仮説 (10a, b) を仮定する本稿の分析に基づくと、状態文が非状態的な文に変容し、*must*

<sup>5</sup> 私の情報提供者は、文法性の判断は先行研究で指摘されているのと同じ判断を示す。(24c) と (25b) は容認不可能で、*must* の意味は根源的意味である。ただし、私の情報提供者は、(24b) には *been* がある方が自然であるとしている。

が根源的意味を表わすことができるようになったとすることができる。

本稿では、副詞節の付加により文が非状態的な文に変容し、法助動詞のみが削除されずに生じる時、法助動詞が根源的意味を表わすことはできるようになったと分析している。この主張の妥当性を、次の (27) を例にとり、考えてみることにする。

(27) a. Be eating when he comes!

b. Be working when she visits!

(cf. Be studying Spanish when I get home! (Akmajian, Steele, and Wasow 1979: 37))

副詞節が付加されることにより非状態的な文に変化したことは、Akmajian, Steele, and Wasow (1979) でも指摘されているように、命令文として用いることができることからわかる。通常は状態の意味を表わす進行形が含まれる文に副詞節が付加された (27) は命令文として適格である。このことから、述部 *be eating when he comes/be working when she visits* は非状態的な述部であることがわかる。Kaga (1985) に従えば、(26, 27) の *be* は動的な *be* であるということになる。動的な *be* を含む文は非状態的な文であり、結果として、制御可能な行為を表わす (27) は命令文として生起することができるということができる。

次に、副詞的語句が付加されることにより、完了形を含む文が非状態的な文に変容し、法助動詞が根源的意味を表わすことができるようになるのであろうか。根源的助動詞 *must* に完了形の動詞句が続く場合、完了形の動詞句の内容は未来の出来事を表わすことが指摘されているが、私の情報提供者によれば、完了形が生じる時、あくまでも過去の出来事を表現し、未来のことを表わすことはない。<sup>6</sup> 法助動詞が根源的意味を表わすということは、その文は非状態的な文であるというのが、本稿の分析の帰結である。すなわち、Kaga (1985) を仮定する本稿の分析に基づくと、法助動詞が根源的意味を表わすのは、非状態的な文に限られる。非状態的な文に生じる *have* は動的な *have* であり、命令文が容認可能であることを予測するが、情報提供者によれば、Akmajian, Steele, and Wasow (1979) も指摘しているように、容認されない。この点を、(29) との比較のもとに、考えてみることにする。

(28) a. \*Have finished your homework by the time I get home!

b. \*Have left the room by the time I get back! (Akmajian, Steele, and Wasow 1979: 37)

(29) Have the work completed by next April!

(cf. Have your homework finished by the time I'm back. (Akmajian, Steele, and Wasow 1979: 37))

<sup>6</sup> 私の情報提供者の判断は、(ia, b) に示すとおりである。

(i) a. \*John must have been sleeping when he comes, and Mary {a. must have been, b. must have, c. must}, too.

b. \*You must have completed the work by next April, and Mary {a. must have been, b. must have, c. must}, too.

完了の have を含む文 (28) の命令文は容認されないが、動的な使役の have を含む文 (29) は容認可能である。(28) と (29) の命令文の容認可能性の違いから、(28) と (29) の have を動的な have と分析することはできない。命令文の容認可能性に関して決定的な違いがあるからである。

また、法助動詞の根源的意味と述語削除の関連に関して、完了の have の場合の容認可能性は確認できていないが、動的な使役の have の述語削除が容認可能であることは、Kaga (1985: 285) で指摘されている。

(30) John must have his watch repaired and Bill {a. must, b. \*must have}, too.

使役の have は動的な述語なので、(30) に示されているように、削除されなければならない。また、法助動詞の意味は、仮説 (10a, b) を仮定する本稿の分析によれば、have は述語なので、(30) は非状態的な文であり、根源的な意味であることが予測されるが、予測の通り、(30a) の must は根源的意味を表わしている。

#### 4.3. 法助動詞の根源的意味と2種類の have

第4.2節では、命令文の容認可能性に基づき、2種類の have を仮定する必要があることを指摘した。ここでは、完了の have と使役の have の違いを指摘する。(31a) には静的な have が含まれているが、助動詞 must の意味は例外的に根源的意味を表わすことができると主張する。なお、(22) は (31) として採録する。

(31) a. [= (22)] You must have completed the work by next April.

b. You must have the work completed by next April.

2種類の have の違いとして、まず最初に、第4.2節で確認した命令文の容認可能性の違いがある。完了の have は命令文に生じることはできないが、使役の have はできる。

二番目の違いとして、完了の have と使役の have の進行形における違いがある。

(32) a. \*You are having completed the work by next April.

b. I don't know how to repair cars, so I'm having mine repaired at the garage round the corner.

(<http://www.eoioviedo.org/anacarmen/passive/causative%20verbs.pdf#search='causative+have'>)

(32b) の使役の have は進行形で用いることができるが、(32a) の完了の have はできない。(32b) では使役の have が用いられ、主語に対して行われた行為 (actions) を表わしていて進行形が可能であるが、完了の have が用いられている (32a) は容認不可能である。静的な have として助動詞的特性

が保持されているように思われる。<sup>7</sup>

## 5. 助動詞省略と同一性要件・復元可能性

本稿では、複数の助動詞 (multiple auxiliaries) が含まれる文の削除現象と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味の相関を考察している。第5節では、be と have は辞書 (lexicon) において動詞か助動詞かの指定がなされ、動詞位置から助動詞位置に繰り上げられるわけではないとする仮説 (10b) の帰結を検証する。Aelbrecht and Harwood (2015: 66) は、非定形助動詞 (non-finite auxiliaries) と削除に関して、Akmajian and Wasow (1975) や Sag (1976) の一般化を、(33) として、まとめている。

- (33) Non-finite *have* always stays overt, *being* is obligatorily elided, and *be* and *been* are optionally elided.

すなわち、削除に関して、i) 非定形助動詞の *have* の削除は許されない、ii) *being* の削除は義務的である、iii) *be* と *been* の削除は随意的であることが指摘されている。この記述の一般化を、どのようなメカニズムに基づき説明するかに関して、最近の研究では、(34a) のような Be/Have 上昇規則 (Be/Have-raising) と相 (Phases) に基づく分析 (Bošković 2014) や (34b) のような、ある特定の機能範疇 (functional categories) の投射を削除の対象として指定する分析 (Aelbrecht and Harwood 2015) 等が提案されている。

- (34) a. Only phases and complements of phase heads can undergo ellipsis. (Bošković 2014: 52)  
b. VPE targets the progressive aspectual layer (when present), and optional auxiliary deletion is the result of optional auxiliary raising out of the ellipsis site and rescue by PF-deletion in the case of non-raising. (Aelbrecht and Harwood 2015: 68)

Bošković (2014) は、相か相の主要部の補部 (complements of phase heads) のみが削除規則の適用を受けられることとする分析を、Aelbrecht and Harwood (2015) は、進行相の投射 (progressive aspectual layer) が削除の対象となることとする分析を提案している。<sup>8</sup> しかしながら、このような分析は、言語現象の事実がうまく説明されるようにシステムが構築されているだけで、何故、相でなければならないのかに関しては、何ら理にかなった説明が与えられていないように思われる。

<sup>7</sup> 未来の出来事を表す完了形の文の *must* は根源的意味を表わすことができる。本稿の分析に従えば、非状態的な文であることになる。結果として、完了の *have* が動的な特性を有することが予測されるが、実際は、そうではない。命令文や進行形で用いることができないからである。静的な助動詞 *have* であるにもかかわらず、何故、*must* が根源的意味を表わすことができるかは、今後の研究課題とする。

<sup>8</sup> 詳細な分析に関しては、Bošković (2014) や Aelbrecht and Harwood (2015) を参照のこと。

英語の助動詞 / 動詞構造は、(35) に示されているような記号配列で構成されている。

(35) a. Betsy must have been being hassled.

b. finite modal > perfect HAVE > progressive BE > passive BE > lexical verb

(Aelbrecht and Harwood 2015: 67)

時制を担う助動詞(定形の助動詞)が述部に生じ、その後に、随意的な要素として、完了の have, 進行の be, 受動の be が続き、最後に、動詞 (lexical verbs) が生じる。本稿では、仮説 (10b) の観点から、(33) の being が動詞であり、それ以外の have/be/been は助動詞であると分析する。Being だけを動詞であるとする分析は、述語 / 動詞句削除と動詞句前置 (VP fronting) から、妥当性があることがわかる。Akmajian and Wasow (1975) が指摘する (36) を例にとり、この点を考えてみることにする。

(36) a. Sam is being noisy and Bill {a. is, b.\*is being} too.

b. They said he would be noisy, and {a. being noisy he is., b.\*noisy he is being.}

(Akmajian and Wasow 1975: 227)

(36a) から being は義務的に削除されなければならないことがわかる。being は述語 / 動詞だからである。動詞は述語削除によって削除されなければならない。この現象を考慮すると、(36a) の Sam is being noisy の構造は、概略、(37) となる。

(37) [<sub>TP</sub> [<sub>NP</sub> Sam] [<sub>T</sub> [<sub>T/AUX</sub> is] [<sub>VP</sub> being noisy]]].

Being noisy が動詞句であることは、(36b) の動詞句前置の文法性からわかる。(36b) の a が文法的なのは、動詞句 being noisy が前置されているからである。他方、(36b) の b が非文法的なのは、動詞句の一部である being が前置されていないことによる。

Have や been が動詞ではなく助動詞であることは、動詞句削除と動詞句前置に関わる言語現象からわかる。この点を、Akmajian, Steele, and Wasow (1979) が指摘する (38) に基づき、考えてみることにする。

(38) a. John couldn't have been studying Spanish, but Bill {a. could have been, b. could have, c. could}.

(Akmajian, Steele, and Wasow 1979: 15)

b. They swore that John might have been taking heroin, and {a. taking heroin he might have been!,

b.\*been taking heroin he might have!, c.\*have been taking heroin he might!}

(Akmajian, Steele, and Wasow 1979: 23)



(38a) から、述部の *been/have been* も、動詞 *studying* とともに、述語削除の対象となり、一見したところ、削除されているように見える。しかしながら、(38b) からわかるように、動詞句前置により前置されるのは、動詞句 *taking heroin* のみで、*been/have been* ではない。このことから、i) *been/have been* は動詞ではなく助動詞であること、ii) 述語削除によって削除されていると分析されてきた *studying Spanish/been studying Spanish/have been studying Spanish* は異なる記号連鎖であると分析する必要がある。*Studying Spanish* と *been studying Spanish/have been studying Spanish* には、動詞句前置に関して違いがあるからである。動詞句は前置されるが、助動詞は前置されないのである。従って、述部の核である述語と完了・進行・受動の相・態に関わる助動詞は明確に区別されなければならない。

(38a) と (38b) の述部に関わる現象の違いから、述語削除が適用されて導かれる場合とは異なる操作を仮定する必要がある。述部の中心である動詞(述語)と述部ではあるが動詞ではない表現、すなわち、助動詞があり、区別されなければならないからである。述部の構成員ではあるが動詞ではない助動詞に適用される、Akmaljian and Wasow (1975) が提案する助動詞省略 (*auxiliary ellipsis*) 等を仮定する必要がある。この点を、(39) を例にとり、考えてみることにする。

(39) John must have been using drugs, and Bill {a. must have been, b. must have}.

Akmaljian and Wasow (1975: 235) によれば、*using drugs* が動詞句で、*must have been* は助動詞なので、述語削除で削除される連鎖は *using drugs* のみであり、助動詞 *must have been* は削除されない。この結果として導かれるのが、(39a) である。助動詞 *been* が削除されている (39b) を導くのが助動詞省略である。

Akmaljian and Wasow (1975) によれば、助動詞省略の適用は一回限りである。この規則は述語削除の後に適用され、一番右側の助動詞を省略するもので、複数の助動詞が省略されることはない。この点を、(40) を例にとり、考えてみよう。<sup>9</sup>

- (40) a. Sam might have been at the scene of the murder, but Bill {a. couldn't have been, b. couldn't have, c. \*couldn't}.
- b. If Bill had been using drugs, then his brother Sam {a. must have been, b. ?must have, c. \*must}.
- (Akmaljian and Wasow 1975: 236)

Akmaljian and Wasow (1975: 236-237) によれば、(40a, b) の a は述語削除が適用されて導かれる。(40a, b) の b は述語削除に加えて助動詞省略が適用されて導かれる。他方、(40a, b) の c では助動詞

<sup>9</sup> 私の情報提供者によれば、(40a) の c の *couldn't* と (40b) の c の *must* は根源的意味を表わしている。

省略が二回適用されていて容認されない。Akmajian and Wasow (1975) によれば、助動詞省略の適用は一回に限られるからである。

(40a, b) の c の文法性から、助動詞省略の適用は一回に限られるという制限が課されていることになるが、複数の助動詞が省略されているにもかかわらず容認される場合があることが指摘されている。この点を、(41) を例にとり、考えてみることにする。

(41) Sam could have been using drugs, but could Bill (have) (been) ?

(Akmajian and Wasow 1975: 237)

(42) Sam could have been using drugs, but could Bill have been (doing so) as well?

(41) の右側の 2 番目の節では、助動詞の *have* と *been* が省略されているが、(40a, b) の c とは異なり、容認可能である。助動詞省略とは、Akmajian and Wasow (1975) によれば、一番右側にある助動詞のみを省略するものであり、複数の助動詞が省略されると文は容認されないのが通例である。Akmajian and Wasow (1975) では、助動詞省略という統語的側面に焦点が当てられ、何故、(40a, b) の c と (41) には違いがあるのかに関して、何ら説明が与えられていない。本稿では、法助動詞の意味をも考慮し、述語削除と法助動詞の意味に対する仮説 (10a, b) を仮定する分析に基づき、説明することができることを指摘したい。(41) には法助動詞以外の助動詞が含まれていない。助動詞 *have been* が含まれる (42) との比較に基づき、考察することにする。(42) では、助動詞 *have been* があり、等位項の最初の節との十分な関連性が保障されていて、文法的であり容認可能である。法助動詞 *could* の意味は陳述緩和の意味「可能性がある」である。一方、*have been* を欠く (41) では *could* に何が後続するのかに関して可能性が多岐に涉り、動詞の原形が続く等の可能性がある。<sup>10</sup> *Have* や *be/been* を削除すると、削除に課される同一性要件や復元可能性への違反が生じることを意味しているように思われる。(41) は容認可能で、(42) には存在しない根源的意味「できる」の解釈が (41) には許される。(41) と (42) の比較からわかることは、(42) には助動詞が顕在化しているので、文は状態的であり、法助動詞の解釈は陳述緩和の意味となる。他方、(41) では助動詞が顕在化しておらず、文は非状態的であり、法助動詞の解釈は根源的意味であって構わないということになっているように思われる。

Sag (1976) や Akmajian and Wasow (1975) や Aelbrecht and Harwood (2015) 等の一般化 (33) の観点で、(41) を再検討してみる必要があるように思われる。非定形助動詞 *have* は通例削除されないからである。Aelbrecht and Harwood (2015: 74) は、*have* は削除されないということを支持する現象として、完了の意味を欠いた意味のミスマッチ (*mismatch reading which lacks perfect aspect altogether*) を指摘している。この点を、(43) を例にとり、考えてみることにする。

<sup>10</sup> 私の情報提供者によれば、動詞の原形に対応する読みが可能となる。

- (43) a. John might have called, and Bill might, too.  
 b. \*John might have called yesterday, and Bill might, two days ago.

(43a)では、一見したところ、削除に課される同一性条件に基づく、完了の have が削除されているように見える。法助動詞 might に完了形が後続する時、意味は過去の出来事を表わすことになるのが通例だからである。しかしながら、(43b) からわかるように、過去の出来事を表わす副詞 two days ago を付加することは許されない。この現象は、Aelbrecht and Harwood (2015) によれば、完了の have は削除されないことを支持する現象である。過去の副詞が付加されないということは、過去の出来事を表わしていない、すなわち、完了形が後続していないことを示唆する現象だからである。

## 6. まとめ

本稿では、述語削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味の相関に関して、相や態を表わす助動詞が含まれている文は状態的な意味を表わし、その結果として、法助動詞の解釈が陳述緩和的意味となる。一方、状態の意味を表わす助動詞が含まれていない文は非状態的な意味を表わし、その文の法助動詞は根源的意味を表わすことを指摘した。この相関は、述語削除が適用されていない状態文と非状態文の法助動詞の解釈と同様であることを指摘した。これをまとめると、(44) となる。

- (44) a. … Modal<sub>[+Epistemic]</sub> AUX [<sub>XP</sub> △] (AUX as stative *be/have/have been*) :  
 状態的 (AUX があることから命題内容は状態を表わす。)  
 b. … Modal<sub>[+Root]</sub> [<sub>XP</sub> △] (XP as dynamic *be/have*) :  
 非状態的 (命題内容は制御可能な行為を表わす。)  
 (XP は述語を表わす。)

(44a) が示していることは、状態の意味を表わす *be/have/have been* が文に含まれている時、文全体は状態を表わすので、法助動詞 must は陳述緩和的意味を表わすということである。他方、(44b) が示していることは、法助動詞のみが生じているということは動的な述語である動詞句が削除されていて、この場合、文は非状態(行為)を表わすので、must は根源的意味を表わすということである。

時・条件の副詞節に生じる法助動詞が単独で生じる時は、(44b) のパターンを示すことから、法助動詞 may/can の解釈は根源的意味となることを予測するが、予測の通りである。

- (45) a. You may come if you will. [意志]  
 b. Come as soon as you can. [能力]  
 c. I would like to stay here if I may. [許可] (荒木・小野・中野 1977: 352)

荒木・小野・中野(1977)が指摘しているように、時・条件の副詞節内で述語削除が適用され、法助動詞のみが生じる時、法助動詞は根源の意味を表わす。

さらに、法助動詞 *could/should* が単独で生じる時、法助動詞は根源の意味を表わす。<sup>11</sup>

- (46) a. John couldn't have been studying Spanish, but Bill {a. *could have been*, b. *could have*, c. \**could*}.  
b. Although Mike shouldn't have eaten, Betsy {a. *should have*, b. \**should*}. (Sag 1976: 28)

(46a) の c と (46b) の b は容認されない文であるが、法助動詞が単独で生じる時、法助動詞は根源の意味を表わす。

使役の *have* を用いた命令文に続けて、確認のために、*You must!* という表現を発することができるが、(47) の *must* の意味も根源の意味である。

- (47) They say you must have the work completed by next April, and have the work completed by next April! You must!

本稿では、(44)にまとめたように、状態の意味を表わす助動詞が顕在化している時に、文は状態的であり、法助動詞は陳述緩和の意味を、状態の意味を表わす *be/have* 等の助動詞が含まれない時、文は非状態的であり、法助動詞は根源の意味を表わすという一般化が成り立つことを指摘した。法助動詞のみが削除されずに生じる時、削除が適用されていない本来の文が非状態的な文であれ状態的な文であれ、その解釈が根源の意味となることを捉える分析が必要であることを論じた。

## 参考文献

- Aelbrecht, Lobke, and William Harwood. 2015. To be or Not to be Elided: VP Ellipsis Revisited. *Lingua* 153 (2015) 66-97.  
Akmajian, Adrian, Susan Steele, and Thomas Wasow. 1979. The Category AUX in Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 10: 1, 1-64.  
Akmajian, Adrian, and Thomas, Wasow. 1975. The Constituent Structure of VP and AUX and the Position of the Verb *Be*. *Linguistic Analysis* 1: 3, 205-245.  
荒木一雄・小野経男・中野弘三 1977『助動詞』(現代の英文法第9巻) 研究社  
浅川照夫・鎌田精三郎 1986『助動詞』(新英文法選書4) 大修館書店  
太田朗 1980.『否定の意味』大修館書店  
Bošković, Željko. 2014. Now I'm a Phase, Now I'm Not a Phase: On the Variability of Phases with Extraction and Ellipsis. *Linguistic Inquiry* 45: 1, 27-89.  
Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

<sup>11</sup> (46a) の c が容認されないとする判断は情報提供者による。また、情報提供者によれば、容認不可能であるけれども、(46a) の c と (46b) の b も意味は根源の意味である。

- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 今西典子・浅野一郎 1990『照応と削除』（新英文法選書11）大修館書店
- Kaga, Nobuhiro. 1985. The Syntax of *Be* and *Have*: AUX or Main Verb. 『英文学研究』 第62巻第2号, 275-292.
- Lobeck, Anne. 1995. *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*. Oxford: Oxford University Press.
- 中右実 1980「文副詞の比較」國廣哲弥編集『文法』（日英語比較講座第2巻）157-219, 大修館書店
- 中右実 1994『認知意味論の原理』大修館書店
- Palmer, Frank Robert. 1988. *The English Verb second edition*. London: Longman.
- Sag, Ivan. 1976. *Deletion and Logical Form*. Doctoral dissertation, MIT.
- Williams, Edwin. 1984. *There*-Insertion. *Linguistic Inquiry* 15: 1, 131-153.
- 安井稔・秋山怜・中村捷 1976.『形容詞』（現代の英文法第7巻）研究社
- Zagona, Karen. 1988. *Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.